

文部科学省委託事業令和6年度「地方やデジタル分野における専修学校理系転換等推進事業」『地域中小企業と連携によるIT担当者育成・採用促進モデル開発と普及推進事業』

「専門学校生地域就職意識調査
(ヒアリング調査)」
報告書

学校法人 YIC 学院

目次

1. 事業の目的
2. 調査の趣旨および目的
3. 調査結果
 - 3.1 調査概要と方法
 - 3.2 調査結果
4. 総評

付録

専門学校生地域就職意識調査（ヒアリング調査）質問項目

1. 事業の目的

経済財政運営と改革の基本方針 2023（令和 5 年 6 月 16 日閣議決定）において、成長分野への学部再編や先端技術に対応した高専教育の高度化などによる学びの転換の促進、未来を支える高度専門人材を育成する専門学校等の機能強化が重要課題として指摘されている。

一方、民間調査では、IT 関連製品・サービスを提供する IT ベンダーやユーザ企業の情報システム部門で活躍する IT 人材が 2030 年には 45 万人不足するとの試算もあり、地方における IT 人材不足への対応も急務である。特に、2024 年問題も重なり、働き盛りの若者人口が少ない地方都市では、コロナ禍後の経済活動活発化に伴い人材不足が深刻化している。こうした中、山口県中小企業家同友会では、会員企業の人材不足解消に向け、山口県と連携して採用強化に取り組んでいる。また、山口県は産業活性化・人口減少対策として、魅力ある働き先としての企業誘致にも力を入れている。誘致企業にとって人材採用・育成は大きな魅力となるため、地域密着型の職業教育機関との連携が不可欠である。

本事業では、以上のような地域ニーズに応えるため、中小企業で働くために必要とされる「汎用的かつ多様な能力・スキルを強みとし、協働的な働き方で ICT 技術を駆使して積極的に課題解決に取り組める人材」を育成する学科（以下、「新学科」）を構築することを目指す。

2. 調査の趣旨および目的

上記のような事業計画の下で、現役の専門学校生が、中小企業が多くを占める地域（地元）での就職にどのようなイメージを抱いているかを把握することは、新学科のカリキュラム開発におけるキャリア教育や就職支援のあり方を検討していくために有用である。また、ICT（IT）に関わる知識やスキルの習得にかかわって、専門学校生がそれぞれの所属校においてどのような学びを経験しているのかを捉えることも重要である。本調査では、専門学校生の地域就職への意識、就職活動を把握し、カリキュラム開発の中でもキャリア教育・就職スキームの開発知見を得ることを目的とす

る。そのうえで、専門学校生の将来に対する希望や不安を理解し、キャリア
アカウンセリングに役立てることを目指す。

3. 調査結果

3.1 調査概要と方法

調査は、2024年12月5日から2025年1月21日にかけて、13名の専門学校生に対して実施した。調査にあたっては、事前に調査内容を説明するとともに、調査結果の取り扱いについて同意書を取得した。加えて、ICレコーダーの利用についても許諾を得た。音声データは調査後、テキストデータに書き起こしたうえで、内容について調査対象者に確認を依頼した。本報告書で使用するデータはすべて調査対象者の確認と許諾を得たものである。

調査は、事前に質問項目を用意し示しつつ、状況によって追加の質問等を行う半構造化のかたちで実施した。調査時間は、1人あたりおおむね1時間～1時間半であった。対象は基本的に1人であったが、調査対象者や調査対象校の都合により2人同時に実施するケースもあった。

以下に、調査対象者の属性などの基本情報を示す。

調査番号	氏名	分野	分野詳細	課程	現学年	性別	出身地
1	A	工業	自動車系	2年制	2年	男	滋賀県
2	B	工業	自動車系	4年制	4年	男	大阪府
3	C	商業実務	ペット系	3年制	2年	女	京都府
4	D	商業実務	ペット系	3年制	2年	女	滋賀県
5	E	商業実務	医療事務系	2年制	2年	女	沖縄県
6	F	商業実務	医療事務系	2年制	2年	女	沖縄県
7	G	工業	情報系	3年制	2年	男	沖縄県
8	H	工業	情報系	3年制	2年	女	沖縄県
9	I	商業実務	医療事務系	2年制	2年	女	沖縄県
10	J	工業	情報系	3年制	2年	男	山口県
11	K	工業	情報系	3年生	1年	男	山口県
12	L	工業	情報系	2年制	2年	男	山口県
13	M	工業	情報系	2年制	1年	男	山口県

3.2 調査結果

以下では、上記の調査項目をいくつかピックアップするかたちで結果を示すこととする。調査対象者とのやりとりを示す際には、上記の氏名（アルファベット）を用いる。なお、Xはインタビュアー（主担当者）である。その他、学校関係者等の参加がある場合は、YやZなどの記号で示すこととする。

① 専門学校への進学理由

専門学校への進学理由は、大きく以下の4つに分類できる。すなわち、(1)好きなこと、やりたいことのため、(2)高校時代までに学んだことをより深く学びたいため、(3)将来に役立つため、(4)目指す職業のためである。以下、それぞれの語りとともに見ていきたい。

1つ目は、(1)好きなこと、やりたいことについて専門的に学ぶためという動機である。言い換えれば、自身の「好き」なことを仕事にするために、専門学校へと進学したパターンである。例えば、自動車系分野のバイクコースに通うAさんは、中学時代に好きになったバイクについて専門的に学ぶために、すでに当時から専門学校への進学を見越した高校選択（工業高校）を行っている。

A：進学を決めた理由っていうのが、中学生の頃にバイクを友達に見せてもらったのがきっかけで、こういうバイクの整備に就きたいなっていうので、中学生の頃から、ここをずっと見てましたね。

X：じゃあ、中学の頃からバイクのことに興味を持っておられたっていうことなんですけど、高校はどんな？

A：高校は、ここにちょっとでも楽にこれるようになっていうので工業高校にいます。

X：じゃあ、よく言う、大学にいきたかったら普通科でとかって、もっと俗に言うと、勉強ができれば普通科でとかっていうふうな言い方をされたりしますが、Aさんの場合は、はっきり目的意識を持って、戦略的に工業高校のほうに進学をされたというふうなことなんですか

ね。

A：はい。

X：ありがとうございます。じゃあ、中学の頃から自動車系の専門学校に
っていうところを考えられたと？

A：いこうと思ってました。

こうした、いわば趣味的なものをきっかけに、その分野を深く学びたいと
考え専門学校進学を選択した者として、Kさんの事例が挙げられる。

K：自分が専門学校に進学した理由がもともと自作パソコンをやっ
て、それに付随してOSのインストールとかっていうのがあるんで
すけど、そのときに何かいろんなエラーが出てきて、よくわからんけ
ど、とりあえずGoogleに聞いて、そのまま対応するっていうんだっ
たんですけども、じゃなくて、どういう理屈でそういうエラーが起こ
ってるのかっていうのとか、どういう理由でそういうエラーが起きる
のかとかっていうのも知りたいんで、で、それが自分でこういうこと
だよっていうんで、自分の腑に落ちるようなかたちで理解できる
というのが目的で専門学校進学っていうのがいいかなっていうので進
学しました。

2つ目は、(1)と類似するが、高校時代までに学んできたことをより深く学
びたいという動機である。Lさんは、高校卒業時点で将来の夢がはっきりと
決まっていない状況の中、商業高校で学んでいたプログラミングや簿記など
をより深く学べば、結果的に夢や目標が見つかるのではないかという見通し
をもって専門学校への進学を決めている。

L：高校のとき、高校がまず商業系の高校に通ってて、その商業で学ん
だプログラミングとか簿記とか商業にまつわることをより深く学び
たかって。高校から特に将来の夢がまだ決まっていなかったんで、より

深くプログラミングとか簿記とかを学んだら、夢、将来がより広がるかなと思って進学しました。

また、医療事務系の学科に所属している I さんも、商業高校で学んできた PC スキルをはじめとする事務的能力を活かしていけるのが医療事務職なのではないかと考え、専門学校への進学を決めている。I さんの場合は、もともと心理カウンセラーになりたいと考えていたが、その仕事を食い扶持としていくことが現実的に難しいことや、一方で家庭の事情により早く働きたいという自身の考えを総合的に評価したうえでの決定であることが、特徴的である。

I: 自分、もともと医療関係の仕事に就きたいなどは思っていて、で、その中で自分、商業高校だったんです。なので、商業高校で学んだ、事務的能力ですという、大きく言うと、パソコンだったり、そういうものを生かせるものって医療事務じゃないかって(笑)、思っ、で、特にこちらの学校だったら、自分もともと患者さんに心から寄り添える医療事務員になりたくて、××(所属校―筆者注)の志学っていう科目が唯一あるんですけど、そこと一緒にまた専門的に医療を学べるってということで、こちらに入学しました。

X: 例えば、さっきおっしゃった医療分野っていっても、今回こちらの学校だけではなくて、大学さんとか短大さんとか、もしくはほかの専門学校さんもあったと思うんですけど、高校で進学するとき迷いませんでした?

I: 迷いました。本当は最初、〇〇大学の心理学の分野のところがあるんですけど、そこちょっと心理学に興味があって、そこいきたいなと思っ、ちよつと将来的に考えて、心理学という分野で心理カウンセラーのみとかで生きていくのは難しいよということもあって、心理カウンセラーだったら看護師と一緒にやったりだとか、だから自分は正直、早めに働きたくて、家庭の事情もあって、ちよつと早めに

働きたかったので、大学は断念して、専門学校を選んだっていう感じ
です。

3つ目は、専門学校で学習し習得する知識やスキルが、将来的に役に立つ
であろうという見通しを持って進学してきたパターンである。これは特に情
報系分野に所属する学生に共通して見られた特徴である。以下は、該当する
GさんとMさんの語りである。

G: 私はもう本当に最初、看護学校に行こうとしたんですけど、全然違
うんですけど、落ちてしまって。もうどこでもいいからとにかくいきたく
て、見つかったのが〇〇（所属法人－筆者注）のこの学校だったん
ですけど、この学校のこの学科に志望した理由が、マーケティングと
かExcel、パワポとか。パソコンを使うものって困ることないなと思
って、この先。絶対的に必要になってくるのかなと思って、それで希
望して入学したって感じです。

M: 〇〇（所属校－筆者注）を知った経緯につきましては、親友から一
緒にこちらのオープンキャンパスに来ないかっていう誘いがあった
のが、一番大きかったんですけど。自分がこの科を選んだのは、今の
時代、Excel、Wordは絶対使えないと、多分事務職とかそっち側に就
くには必要だし、kintone っつものを大学の先輩にお聞きしたら、
そういうものは習わないって聞いたんで、こういうのは武器になるか
なと思って選んだのが、一番の理由です。

・・・中略・・・

X: Mさんご自身は、進学先として、大学とか、短大とか、そんなところは
考えなかったんです？

M: 第一志望が周南公立大学でして、1年生のときの単位が少なかったこ
ともあって推薦取れなく一般で受けたんですけど、一般で落ちてしま
ったので。

X：じゃあ、あくまで最初は大学志望だったんですね。

M：大学志望。金銭的なこともありましてし、親からは大学行ってほしいって言われてたんで、一応、第一志望、大学で、第二志望、この〇〇（所属校）の〇〇科（所属科）。

X：僕のこれは勝手なイメージなんですけど、割ともう大学進学っていうふう決めて受験を考えられてる人って、そもそも専門学校のオープンキャンパスってもう見ようもしないみたいなイメージがあるんですけど、声をかけられてっていうふうなお話だったんですけど、きっかけっていうのは、お友達に声をかけてもらって、初めて〇〇（所属校）のこと知ったんですか、それ。

M：はい。

X：じゃあ、それまでは専門学校のこととかって知ってたりしました？
高校生とき。

M：第二志望の際に、私立大もしくは専門学校考えといたほうがいと担任の先生から言われていたので、一応調べようと思っていたところでちょうど友達から声をかけてもらったので、せっかくなんで行ってみようかなと思って。

両者とももともとは大学進学を目指していたものの、希望を叶えることができず、第二志望以下の選択として専門学校への進学を決めている。しかしながらその過程には、今後の時代において ICT（IT）関連スキルがより必須の能力となるであろう見通しのもとで、それらを大学ではなくとも専門的に学べる場所として専門学校が浮上しているところが特徴的である。

4つ目は、特定の職業に就くために必要となる資格等を取得するためという動機である。一般的に専門学校への進学理由としてイメージされるのが、これにあたるだろう。今回のヒアリング対象者の中では、ペット系の学部にて「愛玩動物看護師」資格の取得を目指している C さんや D さんの事例があげられる。

C: まず、このペットの進学理由が、もともと動物が好きで、動物関係の仕事に就きたいなって思ってたんですけど、国家資格化されていなくて、進学を決めるときに。それで、一度人間の看護の学校に進学したんですけど、やっぱりどうしても動物とかかわれる仕事がしたいと思って、で、そのタイミングで国家資格化っていうのが決まっていたので、人間のその看護の専門学校のを辞めて、こちらに進学したいなと思って、で、辞めてから学校を探してて、近鉄を利用してるんですけど、近鉄で1本で来れるのでっていうのと、学校の雰囲気とかもすごくよくて、オープンキャンパス2回ぐらい参加したんですけど、先生も話やすい人が多かったし、この学校を選びました。

D: 進学理由は、動物看護師の国家資格を取りたかったので、資格を取ってなったら、関西圏では家の近くがここだったので、専門学校にしました。

以上、ここでは調査対象者の専門学校への入学動機を大きく4つに分類して、具体的な語りとともに見てきた。「好き」を理由とした進学、目標とする職業に就くための資格取得を目指した進学など、それぞれの入学動機が多様であるのはもちろんだが、注目したいのは、すべての方が明確に自身の入学動機を語っているという事実である。その中にはIさんやGさん、Mさんのように、本来希望していた進路(=大学)への道が断たれてしまったがゆえの消極的な選択もあるが、そうした状況の中でも将来的な必要性を考慮しながら戦略的に専門学校への進学を決定していることは非常に興味深い。新学科の設立においても、多様な背景のもとでの進路選択を経て入学してくる学生の存在を考慮する必要があるだろう。

②入学動機としてのオープンキャンパスへの参加

本調査において非常に印象的だったのは、先述のCさんの語りに見られるようなオープンキャンパスでの経験である。多くの対象者が、入学のきっかけとしてオープンキャンパスでの経験をあげていた。例えば、自動車系分野の学校に通うBさんは、オープンキャンパスに参加した際、「現場」を知っている教員が多いことをやりとりから知ったことが、進学の原因となったと話している。

X：先生の雰囲気が出ていうふうにおっしゃってたのは、例えばオープンキャンパスみたいなものには来られてっていうことなんですか。

B：オープンキャンパスに来たときに、たまたま縁があったっていうのもあったんですけど、そこでおやじが先生を試すというか。いや、ちょっと言い方悪いんですけど、

X：いやいや。

B：今の現場において、エンジン、オーバーホールしますかっていうことを先生に全員聞いてもらって、そこで、あんまりしないですねって言われたのが△△（所属校－筆者注）以外の全部の学校だったんです。△△の学校だけ、いや、今でもエンジン、オーバーホールしますよっていうことを言われたのが△△の先生だけだったんで、そこで先生の技量っていうか技術力が、現場の人なんやなっていうのが。ほかの学校は、結局〇〇さん（別の専門学校－筆者注）も現場で働いてた方の先生も多かったんですけど、メーカー出資の〇〇さんとか〇〇さんが、メーカーから派遣っていうか出向できたような感じの先生が多くて、ちゃんと現場経験してるっていう先生が本当に△△はたくさんいるっていうことから、△△を選んだ理由にもなってる感じですね。

また医療事務系の分野に所属するEさんは、アルバイトを通じて知った「登録販売者」の資格を取得できる学校を県内で探し、現在の所属校を見つけている。そのうえでオープンキャンパスに参加し、単に資格取得だけでは

なく、就職活動支援やいわゆる「人間力」育成の教育に力を入れていることを知り、入学を決めたという。

E：私はアルバイトをしている中で登録販売者の仕事を知って（？）、県内でまず資格取れるところを探して〇〇（所属校－筆者注）を見つけて、オープンキャンパス来て。あと、資格取得とかだけじゃなくて就職活動とかにも力入れてるところと、あとは志学、〇〇（所属法人－筆者注）の学びにいいなと思って。

X：高校生のときから？

E：そうです。高校3年生ですかね。

X：それはオープンキャンパスで知ったの？志学があるって。

E：はい。

X：登録販売者っていう仕事をそもそも目指そうって思われたのは、理由があるんですか。

E：ちょっと個人的なんですけど（笑）。

X：いやいや、全然いいですよ。

E：私のバイト先の別の部署でドラッグストアの部署があって、社内報とかで、ドラッグストアで資格取って、お薬販売できるっていうので。薬、一般医療薬品の販売なので、自分の知識にもなって、家族とか友達とかにも、お薬の知識とか体のことをアドバイスできたりしたりとか。あとは、資格持ってるので、手に職をつけられるっていうところに魅力を感じてって感じですね。

X：それを決めたのは、高校の早い頃から決められたんですか。

E：高校2年生ぐらい。

同じく医療事務系に所属するIさんは、当初から医療系分野への就職を目指しており、大学で心理学を専攻することを希望していた。しかし、心理カウンセラーの職のみで生活していくことが難しいと知り、さらに家庭の事情で早期に働くことを希望していたことから、大学進学は断念したという。そ

のような中、商業高校で学んだ事務的な能力を活かすことのできる職として医療事務が浮上し、参加した所属校のオープンキャンパスでの経験が、入学の一番の理由になったと述べている。①で取り上げた語りと重複するが、以下に再掲する。

I: 自分、もともと医療関係の仕事に就きたいなどは思っていて、で、その中で自分、商業高校だったんです。なので、商業高校で学んだ、事務的能力ですという、大きく言うと、パソコンだったり、そういうものを生かせるものって医療事務じゃないかって(笑)、思って、で、特にこちらの学校だったら、自分もともと患者さんに心から寄り添える医療事務員になりたくて、××(所属校－筆者注)の志学っていう科目が唯一あるんですけど、そこと一緒にまた専門的に医療を学べるっていうことで、こちらに入学しました。

X: 例えば、さっきおっしゃった医療分野っていっても、今回こちらの学校だけではなくて、大学さんとか短大さんとか、もしくはほかの専門学校さんもあったと思うんですけど、高校で進学のとき迷いませんでした？

I: 迷いました。本当は最初、〇〇大学の心理学の分野のところがあるんですけど、そこちょっと心理学に興味があって、そこいきたいなと思ってたんで、ちょっと将来的に考えて、心理学という分野で心理カウンセラーのみとかで生きていくのは難しいよということもあって、心理カウンセラーだったら看護師と一緒にやったりだとか、だから自分は正直、早めに働きたくて、家庭の事情もあって、ちょっと早めに働きたかったんで、大学は断念して、専門学校を選んだっていう感じなんです。で、ほかにもある、医療事務をやってる専門学校っていうのは3校ぐらいあるんですけど、もうその中でこっち選んだ理由は、もう圧倒的オープンキャンパスですね。こちらのオープンキャンパスは本当に手厚くて(笑)、とてもよかったんです。で、今の先生方がオープンキャンパスも担当してくださったんですけど、本当に心から受け

入れてくれるというか、生徒としてというのもあるんですけど、1人の人間として、人間対人間で見てくれる包容力がとても心地よくて、それで決めたっていうのが一番おっきな理由ですね。

さらに、情報系分野で学ぶLさんも、オープンキャンパスでの経験が、最終的に現在の学校を選択するに至ったきっかけになっていると語る。なおここでYは、同席していた所属校の教員である。

X: 専門学校といっても、いろいろあると思うんですけど、その中でも〇〇(所属校ー筆者注)を選ばれた理由とかって何かありますか？

L: 自分が〇〇に通おうとした理由は、〇〇ともう一つ△△(別の学校ー筆者注)で迷ってたんですけど、オープンキャンパスに参加、どっちにも参加して楽しそうだったのがこちらだったので。

X: 楽しそうっていうときの、この辺っていうの覚えてたりします？もしよかったら。

L: 実際にアプリを使ったんですよ。動画とかを作ったりして。

X: オープンキャンパスですか。

L: はい、何かネコの。ネコですよ。

Y: ネコだったかな。

L: ネコの動画を作ってみたりみたいなそういうのをして、△△、あんまりそういうのがなかった感じだったので、実際に自分でやってみて、こういうのできるんだなって思って進学したいなって。

以上のように、ここで取り上げたBさん、Eさん、Iさん、Lさんはいずれも所属学科が異なっているが、オープンキャンパスでの経験が入学のきっかけとなっているという語りは共通している。大学を含めた進路選択の岐路にある高校生にとって、オープンキャンパスが重要な機会となりうることの示唆に富む語りであるといえるであろう。

③ 専門学校での学びを通じた成長感

本調査では、今後社会に出ていく際に求められることになる能力の一例として、リーダーシップやファシリテーションなどの力を身につける機会があったかを尋ねた。その際に印象的だったのは、このような能力の伸びも含めた、学生の成長感の機会についての語りである。

まずはじめに、リーダーシップやファシリテーション力といった汎用的能力とは異なるが、各分野に固有の専門的な学習にどのように取り組んでいるかに触れておきたい。情報系分野で学ぶJさんは、通信制高校から現在の所属校へ進学しているが、通信制高校出身であるがゆえに学力にはそれほど自信がなかったという。そのため、入学後に専門的な内容を学ぶ中で、そもそも高校時代に扱っていない領域が取り上げられることもあり、その点でギャップを感じ苦勞もしたという。それをどのように乗り越えてきたかについて、Jさんは以下のように語っている。

X：高校が通信制の高校で、あまり勉強に対しての自信がないというふうにお思いになられてたけども、情報工学の分野にすごく関心を持っていて、多分オープンキャンパスとかにも参加されて、すごくいいなっているふうに思われてたことがきっかけだったりするのかなと思うんですけど、実際に入ってみて、高校までの勉強と内容が全然違うじゃないですか。実際に受けてみて、わあ、難しいなとかっていうギャップみたいなのがあったっていうことがあったかなっていうのを伺いたいんですけど、そのあたりどうですか。専門席なこと。

J：やっぱ高校の内容と違うっていうのと、あと、IT分野に関しては学んだことがない知識だったので、最初はすごく苦戦はしました。高校の内容に関しましても、数学に関しては覚えてないところっていうのもあったんですけど、高校のときにやってない数学の内容っていうのもあって、そこに関しては、とても勉強面においては苦勞しました。

X：そのときに、またちょっと気になるところがあって、勉強の仕方とかも、多分高校までと全然違ったのかなっていうふうに想像するんです

ね。そういう専門的なことを、今、苦戦されたっていうふうなお話だったんですけど、一つは、勉強の仕方工夫をしたことがあったかっていうこと。もう一つは、苦戦されたときに、どなたかに相談したりとか、友達とか協力者とかに、先生に相談したとか、いろいろあると思うんですけど、どんなふうにその苦戦したことを乗り越えられたのかなっていうことですね。その二つ、教えていただきたいんですが。

J: 僕の場合は、周りの人にまず聞いたっていうところが、自分の中で工夫したポイントかなと思います。そのうえで、ある程度理解力っていうのを高めたうえで、実際、自分で調べながら勉強するといった感じ
です。

高校時代と異なり、分野固有の専門的知識を、主に2年間から3年間という限られた時間の中で修得していかなければならないのが専門学校の一つの特徴であるが、そうした中で感じた困難を他者と協同的に活動することによって乗り越えている様子が、Jさんの語りからはうかがえる。こうした他者との協働活動の強みは、次に見るグループワーク活動での成長感にもつながるだろう。

今回の調査対象者から共通して挙げられたのは、授業内でのグループワーク活動や実習での経験を通じた成長についての語りである。例えばEさんとFさんは、普段の授業のなかで成長を感じる機会があったかを尋ねたところ、次のように答えている。

F: グループワーク？

E: グループワークぐらいかな。

F: グループワークが多かった。

E: グループワーク、前に出てみんなに発表するみたいななので、一応グループで出した意見を、いいところを全部集めて、それを発表したりとかかな。

また、GさんとHさんも同様に、授業の中での成長感として、グループワークのことに言及している。

H: 印象に残ったのは、よく検定対策とか授業でやるんですけど、でもチームでグループになって教え合ったりとか、あとは、点数も測ったりとかしてるんですけど、教え合うことで自分の知識も身につくし、教えられるので、友達とかの距離も縮められるんで、そこは印象に残った
り。

X: 結構そういう検定対策がってのは多かったですか、授業として。

H: 1年生とかは検定メインとかが多いので。

X: ありがとうございます。Gさんにも伺っていいですか。

G: 私はパソコンがもう、こんな指で押すくらいしかできななかったので、もうめちゃくちゃ速く打てるようになったっていうのが一番でかいですし、

X: タイピング?

G: そうです、そうそう。あとは、自分、グループワークみたいなのがめっちゃ好きで、リーサスっていうのがあったんですけど、リーサスとか。授業でグループワークしていくのがめっちゃ好きで、それ、全力で取り組むのがめっちゃ好きで、協力してくれない方もいますけど、協力してくれる方と一緒に頑張っていくっていうのが、自分、結構大きかったですね。プレゼンとか発表、そういう機会も増えて、緊張とかもなくなっていく感じがするので、自信が持てるみたいな。

このように、学生にとって普段の授業のなかで展開されるグループワークは、成長を感じることでできる最も身近な機会の一つであるということができらるだろう。

また正課内としては、より実践的な活動の中でリーダーシップ等の能力が身についたという語りがある。情報系分野に所属するJさんは、アプリ開発

にかかわる活動にリーダーとして携わった経験が貴重な経験になったと述べている。

J: リーダーシップっていうのは、もちろんチーム開発っていうのもあって、そこでもリーダーっていうのをやらしてもらって、ほかの人に仕事を振ったりとか、あとは、自分だけじゃなくて、ほかの人の進捗の管理であったりとか、自分だけじゃなくてほかの人のことも見るっていうのは、すごく、あまり経験がなかったので、すごい苦戦っていういいんですかね。苦戦はしたんですけど、貴重な経験はできたかなって思いました。

さらに本調査において特徴的なのは、上記のような正課内の授業等の中だけではなく、正課外の活動を通じた成長感についての語りである。具体的には、学園祭の実行員や各学校における学生の自治団体である「学生会」、オープンキャンパスでの学生スタッフといった経験が、リーダーシップやファシリテーションなどの力を身につける機会になったといったものである。

例えばBさんは、実習でのグループ活動における「リーダー」の経験を通じて、リーダーシップなどの能力が身についたと語った後、そうした正課内活動以外の成長の機会として、学園祭実行委員会での経験に言及している。

B: リーダーシップで言ったら、結構実習中でもエンジンとか分解するときに、そんな数があるわけじゃなくて、その数に対して1班、エンジン1個に対して4人、5人、ちょっと人数が多いんですけど、それでも4人ってなると1人、人が余ったりとか、全員が作業しにくいっていうこともあったりするんで、その点を1人リーダーシップ、リーダー的な立ち位置の人がおれば、この人はこれやって、この人は次、ここの作業移って、君はこっちのほうの作業してみたいな、そこで一つの班でもリーダーシップが必要って思ったこともありますし、それに、その班が10個ぐらいあったので、1人1回はリーダーシップを

経験できるのがあるのかなとは思いますがね。

X: じゃあ、全員何かしらのかたちで、そういうのを経験できる機会は一応は設けられているような感じだったってということですね。

B: そうなんですけど、でも、それは自分でリーダーシップ発揮したいなら、それなりに自分で意見しないといけないっていうの、そういう協調性がないと、そこに立てないみたいな感じではあるんですけど。でも、それは1人1回必ずある機会やと思ってます。

X: ありがとうございます。

B: ほかにも授業外のことなんですけど、去年の学園祭の実行委員長を立候補してて。それも、言ったら、自分で言って、任意の参加なんですけど、それでもちゃんと先生に君は優秀だからこれやってね、リーダーやってねみたいな感じじゃなくて、全員いる中でリーダーやりたいみたいな感じで聞いて、誰にでもリーダー、実行委員長、副実行委員長みたいな立場がちゃんと誰でも立候補しやすい場、環境があるっていうのもいいと思いました。

X: 誰でもそういうのに参加ができるような環境が用意されてるっていうようなことですね。

B: はい。

X: それでご自身で、ある種、手を挙げて実行委員長になられたっていう？

B: そうです。

X: 実際、学園祭はすごくうまくいったりした？

B: うまくいくんですけど、反省点もあったりするんで、そこをみんな反省したところを来年に生かすみたいな会議になったりするとき、ファシリテーションかっていう言葉使わせてもらおうと、そういうところも結構身についたりするのではないかと思いました。

次に、「学生会」についての語りである。JさんとLさんは同じ学校に所属しているが、両者とも、授業や実習のほかにこの「学生会」への参加が、専

専門学校で学んできたことを役立てることのできた一つの契機になっているという。このうち Jさんは、専門学校で学んできた2年間のなかで役に立ったこととして、国家試験に向けた座学と実習をあげつつ、合わせて「学生会」の活動に言及している。

J: まずは、1年生の頃にやった座学による国家試験の取得っていうのと、もう一つは、実習です。っていうのは、就職活動にすごいとても役立ったなと考えています。あと、授業とはあんま関係ないんですけど、学校として、ある学生会っていう活動もあって、それもすごい役立ったなと考えてます。

Lさんも、同様に以下のように語っている。

X: 実際に今まで、まだ会社で働いてるわけじゃないので、学生の中でっていうことなんですけど、今までの学生生活の中でそういう知識とかを身につけておいて、役に立ったなというふうに思われた体験って何かありますか？

L: 学生会とかで投票、その学生の投票結果とかを集計とかまとめたりする表を作ったりするのに Excelとかを作ったり。ほかの学科は Excelとかを学んでないので、自分たちが率先して作ったりみたいな。

X: なるほど。ほかの学科のぶんもまとめて作ったりしてるんですか。

L: はい、全体で。

最後にオープンキャンパススタッフについての語りである。先ほどとりあげた Eさんと Fさんは、高校時代にも所属校のオープンキャンパスに参加しているが、専門学校入学後に、今度は自らがその運営に関わる学生スタッフとして参加している。専門学校に入学し、特に役立ったと感じることについて尋ねたところ、それぞれ以下のように語っている。

E: 私はオープンキャンパスの学生スタッフをやったので、それで高校生の来てくださった学生の方に、学科の魅力とか、学校生活どんなだよとか、こういう授業してますっていうのが結構大きかったです。あとは接遇、マナーの授業があったので、それで言葉遣いとか入室退室とかの学びをできたかな。あとは、パソコンの授業が週に何回かあったので、Word、ワープロとExcelは少しだけですけど。タイピングも記録が伸びたりはしました。

X: ありがとうございます。最初に言っていたいただいたオープンキャンパスの学生スタッフって、自分で立候補したりするものなんですか。

E: そうです。もともとやりたいなと思ってたんですけど。1年生の初めに、やりたい人いないですかって。いいなと思ってて、担任の先生に、やらない？って言われて、じゃあ、やりたいですっていう感じでした。

さらに、リーダーシップやファシリテーション能力が身についたと感じる場面についても、両者はオープンキャンパススタッフの経験が印象的だという。

E: 自分はオープンキャンパスがおっきいですね。この学科のリーダーをやったので、土曜日の朝の朝礼、職員の先生たちの朝礼に参加して、それ、今日の数何名ですとかいうのを聞くんですけど。あとは、今日はもし建物の設備とか清掃があったら、エレベーターの使い方とかをみんなに共有してねとか。あとは、募集、総合型とかの案内が入るんだったら、その先生、確実に案内しないとイケないので、学科の先生たちに案内してもらってねっていう共有を、ほかのメンバーにやったりとかかな。そんな感じですかね。

X: すごいですね。結構先生たちに近い距離で経験されてるんですね。ありがとうございます。Fさんはいかがですか。

F: 私も同じくオープンキャンパスのスタッフなんですよ。

X: されてたんですね。

F: はい。ですので、オーキャンのスタッフやってたら、リーダーシップとか結構伸びたなって思います。

またこれらとは性格が少し異なるが、ボランティア活動での経験を通じた語りも見られた。Cさんは、子猫の預かりボランティアでグループの中心的役割を担う中で、上記の能力の成長感があったと語っている。

X: 今、社会人として求められる力とか、世間的にいろいろいわれてる中で、リーダーシップとか、あるいは、ほかの人に共感する力とか、ファシリテーション力、ほかの人の意見とかも取りまとめてとかって、そういった能力も求められるみたいな話があったりするんですけど、ミタムラさんがこれまで専門学校の中で学んできた中で、そういったものが身につくような場面みたいなのがあったとかっていうのがあれば、ちょっと伺いたいんですけども。

C: ありましたね。春ぐらいに子ネコの預かりボランティアっていうのを行っているんですけど、そのときは基本的に先生はかかわってこずに、自分たちで役割とかも決めながら、役割分担しながらボランティアを進めていくって感じだったんですけど、主に1年生のときも今年の2年も、ちょっと中心的にやらせてもらえて、やっぱり意見がすれ違うこともあったんですけど、そのたびに話し合いながら解決して、ボランティア進めていったって感じですよ。

X: その中心的にやられてきたっていうのは、ご自身で手を挙げて選ばれたというか、やった感じなんですか。

C: 結構静かめな人が多いので、誰かが言わないと始まらないだろうなっていうので、大体言い始めて、リーダーっぽい立ち位置に最後までいたみたいな感じですね。

X: クラスの中でもそういう立ち位置でっていうふうな。この預かりボランティアの中でも生きてきたっていうふうな感じなんですかね。

C: そうですね。

同じく学外での活動経験として、より専門性の高い現場での経験を挙げている A さんのような例もある。

A : 僕は去年の夏と今年の夏に、鈴鹿の 8 時間耐久レースのピットクルーとして参加していたんですが、

X : すごいですね。

A : 1 年目はリーダーのもとで動く役だったんですが今年はリーダーとして参加していたので、そのときに実習とかで学んできた技術も発揮できましたし、そこでみんなをまとめてっていうのはだいぶ発揮できたかなと思います。

X : すごいですね。それって、当然リーダーだから、1 人しかいないというか。

A : 一応サブリーダーがいたので、サポートはしてもらいながら。

X : それはご自身で自己推薦的に手を挙げるものなのか、選ばれるのか。

A : 選ばれた。クルーとして行きたいっていうのは自分で言うんですけど、リーダーは学校からっていう感じで。

以上のように、今回の対象者はいずれも、授業内のグループワーク活動や実習、正課外活動など専門学校内でのさまざまな学びの機会を通じて成長感を感じていることがわかる。新学科設立にあたっては、学生がこうした成長感を感じることでできる機会を積極的に導入していくことが求められるといえるであろう。

④現在の ICT (IT) 関連スキルについて

本事業では、「中小企業で働くために必要とされる「汎用的かつ多様な能力・スキルを強みとし、協働的な働き方で ICT 技術を駆使して積極的に課題解決に取り組める人材」を育成する学科」の構築を目指している。これを検討するにあたって、学生が現在の学びの中で ICT (IT) 関連のスキルをどの程度身につけているのか、それはどのような学修をきっかけにしたものかを把握する必要がある。

この点について、共通して言及があったのは、タイピング技術や Microsoft Word や Excel といった基本的なソフトなどのスキルについてである。情報系分野に所属する G さんと H さんは以下のように語っている。

X : ICT 技術やスキルについてってことなんですけど、今もちろん専門的にいろいろと学んでこられてる最中なので、たくさんあるかなというふうに思うんですけど、具体的にどんなスキルとか技術を学んでるんですかっていうのを伺いたいです。すいません、僕が素人なもので、どういうこと学んでいるかって教えていただいてもいいですか、特に ICT 関係について。

G : お金のこと、簿記だったり経済の仕組みですよね、あとは、今後、社会で生きていくうえで絶対的に必要ってわけじゃないですけど、Excel とかパワポとか、そういう技術あったほうが優遇じゃないですけど、ない人よりは全然あったほうがいいじゃないですか。そういう細かいところまで学べるっていうのがあります。

X : H さんはいかがですか。

H : さっき言ったんですけど、データマーケティングでの、ビッグデータ扱って、データを読み解く力を身につけたりとか、あとはビジネスマナーとかも授業であって、敬語とか、そういうの、就活とかでも使えるようなものとかを学んだりもしてます。

X : 実際、まだ就職活動とかもこれからになってくるんですかね。

G : インターン行くぐらいですね。

X：そういうインターンの例えば経験とかの中で、学んできた Excel とかパワポの技術とか、あるいは、さっきビジネスマナーとか、いわゆる接遇みたいなものとかが役に立ったなっていう感じはありますか。

G：インターン行って役に立ったなはないんですけど、仕事先で、例えば経理だとかだったら、パソコン打つタイピングの速さとかも重要じゃないですか。Excel のデータまとめるとかだったら Excel の基礎知識とか関数とかいろいろあるじゃないですか。そういうのも便利に使えたりしますし、検定取っててよかったなっていう実感はありますね。

X：そうなんですね。それを感じる場面っていうのは、実際、その力を使う、発揮できたときというか。

G：そうですね。

X：お二人とも検定取っててっていうふうな話だったんですけど、具体的にどういったのを取られてるんですか、今の時点で。

H：今だと、サーティファイ主催の Excel の検定とか、あとは MOS のパワーポイントと Excel、あとはワープロ検定だったり、あとは日商の簿記検定だったり。

同様の技術やスキルについては、非情報系分野に所属している E さんと F さんから言及があった。2 年間の学習の中でどのようなことが役に立ったかを尋ねた際、E さんは以下のように答えている。

E：私はオープンキャンパスの学生スタッフをやったので、それで高校生の来てくださった学生の方に、学科の魅力とか、学校生活どんなだよとか、こういう授業してますっていうのが結構大きかったです。あとは接遇、マナーの授業があったので、それで言葉遣いとか入室退室とかの学びをできたかな。あとは、パソコンの授業が週に何回かあったので、Word、ワープロと Excel は少しだけですけど。タイピングも記録が伸びたりはしました。

EさんとFさんによれば、医療事務系の分野においても面接時にこれらのスキルの習得状況を聞かれたという。

X：そもそも、お二人の就いていかれようとしてるお仕事、登録販売とか医療事務とかって、ICT技術とかスキル、どれくらい求められるものなんですか。

E：いや、求められるんじゃない？

F：はい、面接でめっちゃ聞かれました。どのくらいできますか、何級レベルですかとか。

X：具体的に、それってWord、Excelとかのことですか。

F：Excelが、めっちゃ、聞かれました。やり方。

また情報系分野に所属するLさんは、就職活動時に、企業側が一定程度のタイピングスキルがある前提の上で募集活動を行っている印象を受けたという。

X：情報系の学科に今、おられるということなので伺いたいんですけど、〇〇さん（就職先企業－筆者注）を主に見られてたということなんですけど、ほかの欲がないときに見てた車のメーカーとかPC関連の会社とかを見てるときに、これくらい今、ICTとかの技術、スキル、WordとかExcelは最低限できたほうがいいなって思われてるんだなみたいなこと。そんなことがご経験の中であれば教えてほしいんですけど、あんまりそういうのは求められてないなと思うのか、一方でこの辺まで求められるんだなと思うのか。

L：ある程度のタイピング技術はあるみたいな感じで、前提で話されました、結構。

X：タイピングは、じゃあ、結構大事なんですね。

L：はい。

X：そういうソフトウェア何使えるとかっていうことよりも、タイピン

グのほうが。

L：そうです。

X：割といろんな企業でも重視されてる印象がある。

L：はい。

このように、情報系分野はもちろん非情報系分野においても、タイピング技術や Microsoft Word や Excel といった基本的なソフトの能力が重視をされているし、実際に学生は専門学校での学習を通してこれらの技術やスキルを身につけていっていることがわかる。

さらに、こうした基本的なツールのスキル取得は、それ自体が専門学校への進学動機になっている場合もある。同じく、情報系分野に通う M さんは以下のように語る。

M：〇〇（所属校－筆者注）を知った経緯につきましては、親友から一緒にこちらのオープンキャンパスに来ないかっていう誘いがあったのが、一番大きかったですけど。自分がこの科を選んだのは、今の時代、Excel、Word は絶対使えないと、多分事務職とかそっち側に就くには必要だし、kintone ってものを大学の先輩にお聞きしたら、そういうものは習わないって聞いたんで、こういうのは武器になるかなと思って選んだのが、一番の理由です。

また、特に情報系に通う学生は一般的な専門学校生と比較しても高い ICT（IT）関連スキルを有している。その典型が J さんである。もともと機械好きで、中学生のころから触るようになったパソコンについてより深く学びたいと現在の学校に進学した J さんは、プログラミングやアプリ開発などの知識・スキルなどに自信を持っていると語る。

J：プログラミング、アプリ開発だったりとかは、自分が、まあ得意とい

うよりか結構好きな分野っていうのもあって、ほかは、あとはネット
ワーク関連の二つは、成績で見ても自信を持てると思っています。

さらに情報系分野の学生は、そうしたより専門的なスキルについて、自身で意識的かつ積極的に学習している場合もある。現在1年生のKさんへのヒアリングの中では、次のようなやりとりが聴かれた。なおここでZは、同席していた所属校の教員である。

X：今の中で今後自分に役立ちそうだと感じるものはありますか？

K：自分の中ではLinuxの授業が一番、OSごと学びたいっていうので、一番わかりやすい授業かな。わかりやすい授業っていうか、それに近い授業かなっていうんで、何かに役立ってるかな。この辺まで役立つんじゃないのかなっていうふうに勝手に思ってるだけなんで。

X：あと自主的に自分で技術とかスキルを向上させるために何か行っていることってありますか？自主学習。

K：自主学習、いや、特にはテスト前ぐらい（笑）。テスト勉強ぐらい。

Z：こんな分厚い本買ってたやん。

K：あれはこれに入るんですか。

Z：入る。あれLinuxとかセキュリティを『ハッキング・ラボのつくりかた』って6000円ぐらいするのがあるんですけど、私、結構学生に本、紹介するんですけど、なかなかやっぱり学生、本買わないんですけど、末次さん、この正月にね。

K：そうですね。1万円ぶん図書券もらったんで、それで。

Z：それも自分で多分勉強するために。

また同じく情報系分野に通うLさんは、すでに就職が決定している企業内で用いるシステム（Drupal）を積極的に学んでいる。ChatGPTをはじめとした生成AIの利用状況について尋ねる中で、Lさんはそのシステムのために生成AIを活用しながら自主学習に取り組んでいると語っている。

X : それからもう一つは今、ChatGPTとか Gemini とかいろいろ生成 AI が割と人口に膾炙してる、いろんな人に使われるような状態になってるかなと思うんですけど、金子さんご自身はそういう生成 AI を使ったりはありますか？

L : はい、ChatGPT すごく使ってます。

X : ChatGPT を一番メインに使ってますか。

L : はい。

X : ChatGPT で何を使ってるんですか。

L : 最近でいったら自分の就職先で使うサービスみたいな、ベンチャーですけど、一応独学でやってて、行き詰ったときとかは ChatGPT に聞いて。

X : なるほど。ちなみに多分聞いてもわからないですけど、そのサービスってどういうサービスなんですか。

L : Drupal (ドゥルーパル) というサービスですね。

X : 初めて聞きました。どんなサービスなんですか、それって。

L : 一応ノーコードで開発できるウェブページを作れるみたいな、WordPress みたいな感じで。

X : WordPress 使ったことがあります。

L : それにもうちちょっとカスタマイズ性が加わったみたいなのが Drupal。

X : 何となくイメージがつかえました。それは、じゃあ、独学で今、やられてるんですね。

L : 一応動画とかいただいたんですけど、ちょっと難しいので、ChatGPT にもうちちょっとかみ砕いて説明をいただいています。

X : 割と、じゃあ、自分で結構使いこなしてる感じということですね。

以上のように、情報系分野かどうかを問わず、専門学校生にとってタイピング技術や Microsoft Word、Excel といった基本的なツールの利用に関するスキルを身につけておくことが必須となっていることがわかる。特にタイピ

ングに関しては、情報系分野に通う L さんが語っているように、企業側がある種前提として想定しているスキルとなっているといえる。そして、情報系分野においてはその他の分野に所属する学生と比べて、生成 AI 等のより高度な ICT (IT) 関連スキルを身につけ、自主的にそうしたスキルを磨こうと努力していることも示唆された。

なお余談ではあるが、こうした生成 AI の普及について危機感を持つ学生の声もあった。先ほども語りを取り上げた F さんは現在医療事務職への就職が決定しているが、将来的には看護師の資格取得も目指しているという。その背景には、AI 等の発達により、医療事務職の仕事が奪われてしまうのではないかという懸念があると述べている。

F: AI とか機械が増えていってるので、今、医療現場でも受付が機械で受付になったりとかしてるので、いずれなくなったらどうしよう？とかは思います。

X: 自分の仕事がつてこと？

F: AI に変わったら？とか思います、それはめっちゃ。

E: 私、全然考えたことがなかった (笑)。

X: 実際、お仕事は内容的にすごい危機感を感じられたりするものなんですかね。

F: はい。一応入力する仕事なので。接客とか看護だったら、人にしかできないことがあるじゃないですか。だけど、診断書作ったりカルテをまとめたりするのは機械でもできそうな気がしてきて (笑)。いずれなくなったらどうしようかなとかは思ってます。

X: さっき、看護のことを学んでみたいっていうふうにおっしゃってたのは、反面、そういう危機感というか、

F: ちょっと。

X: 大丈夫かなっていう？

F: 安定したのが、仕事は安定させたいから、なくなる仕事がいいです。

本調査では、Fさんが語っている生成 AI 発展の功罪についても質問をしているが、多くの者がそのメリット／デメリットの両面を語っている。この点について、自動車系分野に所属する Bさんの語りが印象的であるため紹介しておきたい。Bさんは、授業の中でエンジンオイルの役割を生成 AI に尋ねた際の使用感について、次のように話す。

X：お客様の車を直すという観点から、AI って、まだ不完全な部分もあつたりするじゃないですか。そこの信頼性から、すべて AI に任せてしまった場合に、もしお客様の車に故障、その AI で直した結果に故障があった場合、誰が責任を取るのかという観点から、自分は AI を使わないかなって思います。

X：今の技術的なところではってことですよね。

B：そうですね。部品名称に対しての説明とか、一回授業で AI を使ったことがあって、その AI のところでは、エンジンオイルの役目は何ですかって AI に問いかけたんですけど、自分たちの最適な答えは、エンジンオイル交換しないといけない理由として、家で使われてる天ぷら油は、基本的に 1 回、2 回で終わらせますよね、それを 3 回目以降で使ったら汚いですよねみたいな話をして、なら、天ぷら油もちゃんと交換しますよねって。天ぷら油も外に置いて半年ぐらいたったら、それは使えないよねみたいな感じと同じようにエンジンオイルも交換してくださいって感じのが、

X：わかりやすいですね。

B：僕たち 4 年生の説明やったんですよ。でも、それに対して AI は何と答えたかっていうと、人間と同じような血液の役割であるのがエンジンオイルであるっていうことを。確かに、ああ、でも、それもあるなと思ったんですけど、でも血液ってなると、いろんなものを運んだりするってなったりすると、的を射た(?)っていうか正確な答えではないかなとは思ったんです。抽象的には合ってるんですけど、細かい

ところで言ったら、血液っていったら、老廃物すべて流すとか、そういうわけでもないじゃないですか。ってなったときに、エンジンオイルっていうのはちゃんと老廃物、鉄粉とかも除去してくれたりするっていうところを見ると、それやったら、まだお客様のわかりやすい観点からいくと、血液がいいかなと思ったんですけど、自分たちの言いたいことを伝えると天ぷら油になったりってところで、AI との相違は。

X: じゃあ、実際授業で使ってみて、あまり納得感を持ってないレベル感だっというのに？

B: いや、どっちも軍配が上がってるって感じですね。お客様にわかりやすく説明するのであれば、AI に軍配が上がってたんです。血液っていう言い方、ワードが AI が勝ってたんですけど、意味としては自分たちの天ぷら油のほうが合ってたっていう、引き分けみたいな感じのかたちだったです。

X: ある種、それは、じゃあ、言い方的には、でも完全ではないっていうことですよね。

B: そうですね。

X: そういうのをお話を伺っていると、ある種、折衷していくというか、さらに AI の、ある意味、よさですよ。血液っていう表現をすることでわかりやすいっていうよさとかをご自身の説明とかに取り入れるっていうふうなかたちで、さらにいいものを作っていくときには使えるかもしれないっていうふうな感じですかね。

B: 答えを導くんじゃなくて、その途中にある、まあ言ったら、壁とかアイデアを欲しいときに AI を使うのがちょうどいいんじゃないかなっていうのは思いました。答えにすべて AI に任せてしまうと、結局は自分で考えずに、それをどうやってどうしたんかみたいな、その答え、途中が見えないからこそ、答え作ったところで自分が何をしてるのかっていうのがわからなくなると思うんで、途中で考えるところを AI に任せたらちょうどいいんじゃないかなって、あの授業で思いまし

た。

生成 AI の技術的發展が著しい中、F さんのような危機感はある種当然なのかもしれない。実際、十数年後の社会では労働人口の約半数の仕事が AI によって代替可能との試算が出されて久しい。そうした状況の中で、B さんのような冷静な状況把握と分析の手法の獲得が、今後より一層重要になってくると思われる。

⑤ 県内／県外でのキャリア展望

現在考えている進路について、県内／県外のどちらを希望するかを尋ねた。すでに就職先が決定している者については、就職先企業の所在地を尋ねている。

現在の居住地ベースで分類すると、明確に県内を希望（ないし就職決定）している者が6名、県内をもしくは近隣県を希望（ないし就職決定）している者が6名、明確に県外を希望している者が1名であった。県内を希望する6名のうち5名は全員が沖縄出身であり、地域的な特徴が示唆される項目でもあった。以下、それぞれの語りを見ていきたい。

まず、県内を希望（ないし就職決定）している者である。医療事務系の分野に所属し地元の沖縄県内での就職が決まっているEさんは、高校卒業後の進路を考える段階から、すでに地元での就職を見据えていたという。

X：二つ目の質問ともかかわるんですけど、ほかに例えば大学にいつてみようとか、あるいは短大とか、そういうところについてみようみたいな感じで迷われたりされましたか。

E：いや、大学とかは考えてなくて、一応県外の専門学校、登録販売者のところも探したんですけど、いずれは県内就職がいいなと思ってたので、それを考えたら、地元っていうか、沖縄で実習とかできたほうがいいかなと思って県内にしました。

このような個人的なキャリア観のほか、家族との関係から地元での就職を希望している者もいた。これは以下のHさんのような語りが典型的である。

H：自分も県内で考えてますけど、姉が2人、県外での就職してて、私が姉妹で一番最後なんで、自分も県外に行っちゃったら、親にもし何かあったときにすぐ向かえないなと思って、それで県内就職で、今のところ思ってます。

以上のように、県内就職を希望している者は、「地元になりたい」という個人的キャリア観とともに、身近な家族との関係を考慮した選択であることがわかる。特に親が身体的・精神的な困難を抱えている場合などは一層、自身がそばにいてあげたいと地元での就職を希望する傾向にあるといえるであろう。ここでは語りを掲載していないが、沖縄県の医療事務系学科に所属する I さんの事例などがあてはまる。そしてこうした家族を考慮した選択は、次に見る県内もしくは近隣県を希望（ないし就職決定）している者にも見られる。

近隣県での就職を希望している M さんは事務や経理の職へと就くことを想定しつつも、夢であるアニメ会社への就職も希望している。そうした事情もあり、現在はあくまで県外での就職を希望しているが、自身の身体的理由や一人っ子であるという理由から、県外だとしても近い方がよいと考えている。以下、その語りである。

X: さっきアニメ会社とかも含めて事務とか経理のお仕事っていうふうなお話されてたんですけど、将来的に就職先を選ぶとき、場所っていうのは、山口県内とかで考えたいのか、それとも東京とか大阪で、あと京都なのかな、出たいっていうふうに思うのかって聞かれるといかがですか。

M: 今は県外で考えてます。主に福岡だったり、広島、岡山、そのあたりで、今、考えてます。できるだけ近いほうがいいかなっていうのは考えてます。自分、一人っ子で、自分がいなくなると親 2 人になってしまふんで、何かあったってことを考えてしまふと、遠くには離れづらいですし。自分の病気のこともあるんで、何か助けを呼ぶってなったときにも遠すぎると、誰も友達とかがいない状況になるとって、ちょっと不安になるので。県外に出たいんですけど、東京とかだと遠すぎるんで、近いほうがいいのかなっていう考えになってしまふんです。

このほか近隣県への就職が決まっているケースとして、J さんの事例があ

げられる。Jさんは学校が所在する山口県の出身であるが、就職先は隣の広島県の企業である。広島県を選んだのは、自身がやりたいと考えていた開発業務が行える企業が山口県内にはあまりなかったことが大きな要因だとしているが、他方で自身の趣味的活動を行う上で広島県の方が都合がよい面もあるという。また、現時点では山口県に戻るつもりはないが、そのように考えるのも、距離が近いということが影響していると述べている。なおここでZとは、同席していた学校関係者である。

X：僕自身も、趣味とかの話にもなってくるんですけど、そういった面でも、やっぱり県外のほうが僕にとっても都合がいいといたしますか、っていうのもあって、県外にいきたいっていうふうになりました。

Z：あと、その先に将来、行ってすぐ戻ることはないと思うんで、まあ隣の県なんで、帰ってくるとかいうことは、かなり確率は低いかなと思うんですけども、将来は山口県に戻りたいとか、そういうのはあったりとか。

X：今のところは考えてなくて、距離も近いので。

以上のように、県外への就職を希望していても、それはなるべく地元に近い場所だと想定している者が今回の調査対象者に多くいる点は特筆すべきところである。全国的な動向においても、専門学校卒業者はその学校が所在する都道府県内に就職する比率が大学に比して高く、これは若年世代の人口流出やそれに伴う人材不足が懸念されているなか、専門学校の役割や意義として非常に重要なポイントであると思われる。今回の調査対象者が有している就職地の希望を実現できるような体制整備が求められるであろう。

最後に、今回の調査では1名のみであるが、明確に県外での就職を希望する者である。これはCさんのケースが該当する。Cさんは動物看護師としての就職を検討しているが、その希望場所は彼女の地元である京都府から離れた北海道である。そこには、彼女が取得を目指す「愛玩動物看護師」は国家

資格化（2022年）されてからまだ日が浅いこともあり、有資格者としての業務に携われたり、十分な待遇を受けられたりする環境が十分に整っていないという背景がある。そうした中、自分にとって納得できる職場を全国の動物病院から探し、見つけたのが現在希望している北海道の病院であった。この点について、Cさんは以下のように語っている。

X：動物病院のほうに勤められるっていうふうなことをおっしゃってたかなというふうに思うんですけども、動物病院一本でずっと考えて就職活動とかをされてきたのか、それとも、ほかの国家資格を生かせるような仕事も検討されてきたのか、そのあたりのこと、ちょっと伺ってもよろしいでしょうか。

C：まずやっぱり臨床経験が欲しいなと思ってたので、動物病院一本で考えてきました。

X：臨床経験が欲しいっていうふうに思うのは、どうしてなんですか。

C：資格名が動物看護師なので、看護ができなければ、持ってるだけなのかみたいな感じに思われてしまうかなっていうのと、もともと動物病院に勤めたいって思っていたので、絶対臨床経験は欲しかったなっていう感じですか。

X：ありがとうございます。病院って、すいません、これ、私、無知なので教えていただきたいんですけど、クリニックとか病院によって給与とか働き方とか、結構ばらばらしてるものなんですか。

C：はい、そうですね。結構地域とかによって給与も違いますし、やっている、見れる動物とかも違ったりするので。

X：確かにそう言われてみればそうですね。ご自身は何を一番大事にして今の就職先に決められたんですか。

C：やっぱり国家資格化されているので、国家資格化されてからできることっていうのが増えてきているんですけど、いまだに国家資格ではない動物看護師さんが働いていらっしゃるところとか、獣医さんの考え方によっては、動物看護師さんはちょっと獣医さんの補助みたいな

感じで動いてる病院が多くて、で、私が今、入りたいなと思っている動物病院さんは、国家資格化をすごく生かされていて、動物看護師は動物看護師の仕事ができる。動物看護師として国家資格を生かしたうえで働けるっていうのがすごくポイントで考えています。

Cさんの場合は、国家資格化されて間もない「愛玩動物看護師」の資格をきちんと活かせる職場を選択する経緯のなかで県外を希望しているが、先ほどの事例にも見られたように、地方圏ゆえに自身の望む就職先の選択肢が少ないという声も聞かれた。

⑥地元企業へのイメージや地元就職のメリット／デメリット

本調査においては対象者の全員が各学校の所在県ないしはその近隣県の出身であった。その点で、比較的「地元」と距離が近い環境で学んでいるといえる。新学科においては、とりわけ地域（地元）の中小企業へと参入していく人材の養成が目指されているが、その際には「地元」で就職することへのメリットを積極的に提示するとともに、学生自身にもそのメリットを実感してもらうことが求められるであろう。このような見通しの下で本調査では、地元企業に対するイメージと地元で就職することのメリットやデメリットを尋ねた。すでに県外への就職が決まっている者に対しては、仮に地元企業に就職するということを考えたら、という仮定のもとで回答してもらった。以下、これに関わる語りをみていきたい。

まず地元企業イメージとして聞かれたのは、規模や給料の都市部との差についてである。このことは、就職先の選択に当たって、地元企業が選択肢として入りづらいことともかかわっているであろう。例えば、情報系分野で学びすでに県外企業（隣県）への就職を決めている Lさんは、地元である山口県の企業イメージを次のように語る。

J: 地元だと、まず IT 業界企業っていうのが少ないっていう点と、あとは、IT 企業じゃなくてメーカー企業の社内 SE っていうところが地元企業は多いのかなっていうふうに、個人的に感じました。

X: それに比べると、広島は全然違うんですかね、そういう規模とかも含めて。

J: 広島の企業全体を見たわけではないので、そこら辺に関しては、あまり詳しくは言えないんですけど。自分が見た企業では、規模は全然違うなって感じました。

こうした選択肢の少なさについては、アニメ会社への就職を希望する Mさんからも聞かれた。Mさんは合わせて都市部のほうが給料が高いのではというイメージも語っている。

X：ちなみに県外に出たいっていうのは、何か理由があるんですか。

M：一番っていうわけではないんですけど、もし自分がアニメ会社とかそっち側に入るって決めた場合なんですけど、山口県だとないんですよ。1カ所、2カ所ぐらいしかなくて、そこも本当にできることっていったら、下請けの企業になってしまうんで受注されたことしかできないし。ってなると、やっぱり大きいところに入りたいたいっていうのはあるんで。どちらにしろ、あと、給与とかそちらの面でも多分都会のほうが高いのかなっていうイメージが結構あるので。ちゃんと調べたってわけではないので、ちゃんとしっかり山口県内が給料低いとは言えないんですけど。イメージとしては、県外のほうが給料高そうというイメージがあるので。

X：山口は、そういうアニメ系の会社とかが少ないんですね。

M：はい。周南に一つあったっていうぐらい。多分、周南市に一つあった気がするんですけど、周南市かどうか忘れた。1カ所は、確かあった気がします。

このような企業規模や給料の都市部との差異を認識しながら、他方で地元であるがゆえのメリットについて触れている者もいる。自動車関連の企業（隣県）への就職が決定しているAさんは、地元である滋賀県の企業とそこで働くことへのイメージを以下のように語っている。

X：例えば地元で就職しなきゃいけないみたいなことになったら、どういったことが制約になってくるか、まあ、地元で働くことのよさとか、一方で、実際〇〇とか〇〇（自動車メーカー）とか、そういった企業が滋賀にはないっていうふうな企業の数の少なさとか選択肢な少なさみたいなものも、いろんな要因としてあるのかなっていうふうに思うんですけど、Aさんの感覚として、地元で就職することとか地元企業に対してのイメージとか、そういったものが今お持ちであ

れば伺いたいんですが。

A：地元企業、滋賀のテレビとか見ると、いろいろCMやってて、滋賀のことを考えてやってはるので、そういうところはいいなという、すごいよくやってはるなみたいな感じはあります。けど、やっぱり人が少ないので、やることになっていうのは思っちゃいますね、ディーラーとか行くと。

X：滋賀の割と規模の小さなディーラーと、大きなところのディーラーって、ディーラーとしてやる仕事とかも全然違うものなんですか。

A：仕事の的には、どうなんですかね。まあまあ、でも、車検ができたりできなかつたりっていうのはあるかもしれないです。ただ、やっぱり小さいと固定のお客さんがついてるので、そういうところはいいかなとは思います。

X：規模が小さいながらのメリットっていうのもあるだろうっていうところですね。

A：そうです。

X：お話を、じゃあ、伺っていると、Aさんの的に別に滋賀に対して悪いイメージを持ってるとかっていうのは全然なくて、

A：全然。

Aさんが希望する規模の自動車メーカーは確かに地元の滋賀県にはないものの、一方でCM等で地元企業の活動を見ると、が地元のことをしっかりと考えていることがわかり好印象を持っているという。そのため、近隣県への就職は「地元から出たい」というような消極的なものではないことが印象的である。この点は、動物看護師を目指しているDさんからも、地元の企業スポーツチームが地域活性化の取り組みに力を入れていることを好意的に評価していることとも重なる。

以上のように、主に県外（隣県を含む）への就職を希望していたり実際に決定している者から語られたのは、地元企業の規模や給料などに起因する選

択肢の少なさであった。特に給与については、県内就職希望者からも進路を決めるうえで重要な条件であるという語りがなされている。地元である沖縄県内に就職が決定している Eさんと Fさんは、この点について以下のように話している。

X：そういうふうに地元で働きたいっていう人が増えていくために、もうちょっと地元企業としてこういう条件があったりとか、こういう待遇だったりとか、あるいは、こういう要素があったらとか、いろいろ給料とか職場環境とか仕事のやりがいとか、こういうふうにいるいろいろ書いてるんですけど、もっとこういうのがあったら地元に残る人増えるんじゃないかなっていうふうな、本当に思ってることで構いません、アイデアとかがあれば教えていただきたいんですけど。

F：とりあえず、給料。

E：給料。沖縄は低いので給料と、あとは、通いやすさ。やっぱり車、必要なので、自宅から通いやすかったりとか。あとは、もし那覇に住んでて名護に飛ばされますとかなったときに、社宅だったりとか社員寮があったらいいのかな。会社によるかもしれないんですけど、あったらいいと思う。

このように、地元である県内就職を決めている者も、その給与が県外就職する場合と比較して相対的に低いことは認知している。「給与が大切」としながらも、それが相対的に低い水準にある地元での就職を選択するのは、いったいなぜであろうか。

この点を考えるために、次に地元就職へのメリットとデメリットについての語りを見ていきたい。まずメリットとして挙げられたのは、地元であることの「安心感」や、地元の人が「温かい」といった率直な思いである。医療事務系の学科に所属する Iさんは、高校時代の進路選択の際、親の身体的・精神的事情を考慮し、なるべく身近にいてあげたいという思いから、現在は

県内での就職を考えていると話す。Iさん自身、いずれは独り立ちしたいという思いを持ちつつも、他方でそうした身近な人と離れて一人で暮らしていくことに不安を感じており、葛藤している様子がうかがえる。その際にIさんが語っているのが、地元で暮らすことの「安心感」についてである。

I: 私の場合はやっぱりあまり地元から、親もいますし、離れたくないっという気持ちが一番強いんですけど、やっぱり私、もともと南部のほうに那覇に住んでるので、南部寄りなんですけど、やっぱり自分の精神的にも、ちょっと身近な人と離れると、多分1人じゃあ最初はきついつというのがわかってるんですね。絶対ちよっときついだろうなっていうの、わかっている、でも、独り立ちはしたいんです。一人暮らしはしたいんですけど、

X: あこがれるね。

I: そうなんです。ただ、いきなり中部に行ったりだとか、そんなんは多分自分できないなと思っていて。やっぱりローカルって安心感がどうしてもあるっていいですか。ただ、給料だったり、交通の、なので、やっぱり混み合ったりとか、そんなのも考えて、住むところだったり、車だったり、バスだったり、そういうの考えていくと思うんですけど、やっぱり今の現状、クリニックのお給料が高かったり(笑)、とかも、やっぱりするのでそこら辺で正直迷ったりもするんですけど、やっぱり将来もありますし、貯金はしていきたいですし。

また、「住み慣れた場所」であるがゆえにメリットを感じるという声もあった。Lさんは、長年住み慣れた場所であるがゆえにその環境を知っていることは強みになると、鉄道を例に語っている。

X: 地元就職の魅力とか、一方で地元就職を実際されるからあんまり抵抗感はないかもしれないんですけど、地元就職をすることのメリット、こんなことがあるよねとかって何か思いつくことがあったら教えて

いただきましたんですけど。

L: ずっとその地元に住んでたからこそ土地勘とか不便さとか電車のと
かわかるから。あと山口のことを結構知ってるから、いろいろ便利か
なと思います。

こうした点は、動物看護師を目指すCさんからもその専門性と絡めて語ら
れている。

C: 地元で働くとなったら、やっぱりずっと住んでいるところなので、ど
れぐらいの人がペットを飼っているのかみたいなどころもわかりま
すし、気候とかもわかりますし、気候がわかることで動物の状態とか
もわかったりすることがあるので、それぐらいですかね。

X: そういうご自身が動物看護師として働いていかれるときに、また、給
与とか、そんなのとは別の働きやすさみたいなものが地元だとあるん
じゃないかっていうところですかね。

C: はい。

一方、デメリットとしては、地元のネットワークの狭さについての言及が
あった。この点について、Bさんの語りを見てみたい。

B: ベッドタウンに住んでるからっていうのもあって、ディーラーとか
も、ほかの市に比べてめちゃ多いっていうわけでもないんですけど、
それゆえに地元就職が難しいっていうところとか。近いところはいい
と思うんですけど、逆に近すぎて、お客さんに家を覚えられたりする
っていうのも怖いかなっていうのもあったりすると思うんで。実際、
お母さんのほうが経験したことがあって。お客さんのほうに家、覚え
られて、怖い思いしたっていうのも一個、経験談で聞いたのもあった
んで、地元でやるとしたら、人間関係が太く(?)ないといけないっ
ていうところもあったりするんで、そういうところが難しいなってい

うところもあったりしましたね。

X：人間関係面的なことか、個人情報とかのこともそうですしね。

B：地元って、世間話が広がるのも早いと思うんで。何か印象悪いことをすべて言われてしまったら、そこ、全員が印象悪く捉えられたり怖いところもあったりするんで、地元就職っていうのは、そういうところのデメリットもあるのかなと思いました。

以上のように、地元就職のメリットとしては「地元であることの安心感」や「住み慣れた場所」であるがゆえの強みに関わるものが、デメリットとしては地元のネットワークの狭さがあげられた。しかしながら、付言しておきたいのは、今回の調査対象者の中で明確に「地元が好きではない」と語った者はおらず、県外（近隣県）での就職を希望している者もあくまで給与などの外的環境がプッシュ要因になっているということである。

⑦就職（キャリア形成）において重視すること

以上のような県内／県外の就職希望意識に関わらず、「働く」にあたってどのようなことを価値観として大切にしているかを尋ねた。地域（地元）の企業への就職を促すにあたって、学生が大切にしている価値観を把握しておくことは非常に重要であると思われる。

この点について今回の調査対象者の語りとして特徴的だったのは、先ほどのEさんやFさんの語りに見られた「給料」についてである。合わせて休日についても重視しているという語りがみられた。以下、いずれも情報系分野のJさん、Lさん、Mさんの語りである。

X: Jさんが今後キャリアを形成して働くときに、この辺は譲れないなっていう条件とか価値観みたいなものがあったりすれば、それを教えていただきたいんですけど。

J: やっぱり休みの日っていうのは、週2日は欲しいなって考えてました。

X: その条件を満たしてるところがっていうのは結構最優先とか、候補の上位としてはあったような感じなんですかね。

J: そうですね。

X: Lさんご自身、何かそのあたりで重視されたポイントってあったりしますか？

L: 休みとかです。休みとお金と、その辺です。お金とか休みとかです。

X: 具体的に例えば休みって。

L: 土日が休みがよかったので。

X: 完全の週休2日がよかった。

L: はい。

X: その企業（地元企業－筆者注）に例えば就職するってなったときに、こういう条件とか要素は最低限あってほしいなとかって思うことっ

て、給料とか、職場環境とか、休みとか、やりがいもそうだと思いますけど。

M：その会社の経営自体に多分全然詳しくないと思うんで、働くのも初めてになるんで、給料に関してはあんまり言いたくはないんですけど、できたら初任給は大体 18 から 20 万もらえて、普通の毎月もらえる給料だと 35 万ぐらいもらえたらいいかなとは思っています。

X：ボーナスとかそんなのがいっぱいあったほうがいいなっていうイメージですか。

M：はい。あと、休みは土日できたら休みが欲しいです。

X：完全の週休二日だ、やっぱり。

M：はい、週に 2 日が。

以上の点は、本事業のアンケート調査（「専門学校生地域就職意識調査」）における問 30「あなたが大切にしているもの、大切にしていきたいものについて、1 番を最大にして順位をつけてください」に、多くの者が「お金・経済」を第一優先とみなしている結果とも符合する。また、休日に関しても言及がなされていることをふまえると、いわゆるワークライフバランスを重視する傾向にあることも示唆されるであろう。このことを率直に表現している D さんの語りを最後に引用しておきたい。

X：これから仕事、やりがいはすごくあったほうがっていうふうなことをおっしゃってたと思うんですけど、こういうこと、働くにあたって大事にしていきたいなって思われてる価値観みたいなものって、あたりされますか。

D：私は、仕事とプライベートをどちらも充実させたいって思いがあるんで、それを大事にです。

X：いわゆるワークライフバランスみたいなものを大切にできるような会社だといっている感じですかね。

D：はい。

⑧就職支援について

最後に就職支援についてである。新学科でなされるべき就職支援体制の在り方について、専門学校生が就職活動等の中でどのような学びや支援が役立っているのか、反対に、何が不足しているのかをふまえた検討が求められる。このことについてまず、授業内で行われる基本的な接遇指導や面接指導への言及を見てみたい。EさんとFさんは、所属校の授業において行われている「センスアップセミナー」で面接対策を行ったことが、実際の就職活動でも活きたと語っている。

F：私はセンスアップセミナー、面接の。

E：面接の練習みたいな。

F：本番と同じようにやる行事じゃないよ、何だろう？

E：何て言えば？あれ。何て言えばいいんですか。機会があるんですけど、

F：これ、1回だけじゃなくて結構何回かあって。また私たち、学科でもあったんですよ。学科別とかで。学校の先生たちがランダムに、知らない先生たちが面接とかしたりするので、実際に面接するときの対策にはすごい役立ったかなと思うんですけど。あと、医薬品とは別なんですけど、私たち、マナーじゃなくて秘書っていう授業があって、それもおんなじように言葉遣いとか身だしなみとかマナーとか学ぶんですけど、それがとっても役に立ったなって自分では思っています。

X：センスアップセミナーとかいうのも、あるんですね。ご自身的にはそういうのは得意なほうですか、面接とかって。

F：いや、私、本当に本当にだめで、面接。緊張するんですよ、人前で。だけど、これ、少なくて3回ぐらいあったんで鍛えられました。大丈夫でした。

X：じゃあ、実際、就職活動の面接のときにも割と自信を持って？

F：できました。

また、これから就職活動を行う者にとっては、履歴書の書き方や接遇とい

った基本的な指導が役に立っているという。CさんとMさんの語りである。

C: 今年に就活に向けたような授業が組み込まれていて、履歴書の書き方だったりとか、電話のかけ方とかだったり、そういった授業があったんですけど、そういうのはすごく役に立つなって思います。

X: これまでご自身の人生の中で、あんまり履歴書を書いたりとか、電話の対応とか、いわゆる社会人マナーみたいなものって、あんまり学ぶ機会はないものなんですかね。

C: そうですね。履歴書は何度かアルバイトを応募するのに書くんですけども、その正しい書き方っていうのはやっぱりわからず、アルバイトなので、ちょっと緩い部分もあるので、そういうのは知らなかったの、教えていただけるとありがたいっていう感じですね。

X: これから就活とかされることになると思うんで、まだ具体的に何か活動されてるわけじゃないと思うんですけど、例えば学校の今まで受けてきたキャリア支援とか就職関係の指導とか支援みたいなもので、これは役に立ってるとか、役に立ちそうだなみたいなことって、あったりされますか。

M: そうですね。それを言います。今、履歴書の書き方というのを学ばせていただいたんですけど、多分バイトしてる方は書いたことあると思うんですけど、もししてない方がいらっしゃるんなら、その方にとっては本当にいい機会だと思いますし、面接じゃ、もう話が多分全然違うと思うんで、そこに関して本当に学べてよかったなとは思いました。

このような基本的な指導への言及はほかにも多く見られた。以下、それぞれ該当する語りである。

A: 合同企業説明会前に礼儀作法とかのやり方の授業があったので、そういうので礼儀とかはわかっていたので、そこはだいぶ生かされたか

なと思います。

X：そういう社会人としての基本的なことってというのが、実際役に立ったかなっていうところなんですね。

A：はい。

I：第一印象ってというのがやっぱり就活、大事だと思ってて、その中でやっぱり一番履歴書です。履歴書が今は電子のところもあるみたいなんですけど、自分のこの〇〇（所属校－筆者注）に硬筆という授業があって、硬筆の外部の講師の方が週2で来てくださって、実際に履歴書を書き上げたんですね。で、実際のこの〇〇の生徒が先輩が実際に履歴書出したときに、何で、こんなにきれいなもの？みたいな（笑）、やっぱり声を結構いただくらしくて、なので、この文字を鍛える時間があったので、今はもう硬筆の授業終わっちゃったんですけど、そこのほうで、まず履歴書を仕上げるというスキルは身につけましたし、あとはセンスアップセミナーといって、今からになるんですけど、実際に面接を先生方とする時間があって、で、そこでいろいろ多分悪いところだったり、そういうのは多分直していく時間になると思うんですけど、そもそもスーツ登校っていうのも、私たちあって、前期が結構多かったんですけど、もう週1、2とか、それが続いたりとかもして、やっぱりスーツって着こなしが、やっぱり大事じゃないですか。なので、浮かないように、この学校生活の中でスーツを1日着こなしながら授業を受けたりなどしていたので姿勢だったりとか、そういうものが結構学べたんじゃないかなと思います。生かせるんじゃないかなと思いますね。

このように、授業内で行われる基礎的な接遇指導や面接指導は、そうした活動を経験したことがない学生たちにとっての第一歩として、非常に重要な機会と経験になっていることがわかる。

次に、具体的な就職支援活動への言及である。その一つとして、就職支援専門部署の利用についてみてみたい。調査対象校の中には、「キャリアサポートセンター」という専門部署を設けている学校があり、この利用についての語りもみられた。例えばLさんは、就職活動にあたりキャリアサポートセンターを利用していましたが、利用者が多く予約の必要があり、また肝心の面接内容にかかわる練習というよりは形式的な入退室についての指導が多かったこともあり、改善が必要ではないかと提言している。

X：就職活動をする中でこの辺もうちょっとやっとならよかったかなと
かって思うことって何かあったりされますか？

L：面接練習ですね。キャリアサポートセンターみたいな教室があるんですけど、面接練習をしたのはしたんですけど、入退室ばかりだったので。もうちょっと中身をやりたかったなって感じました。

X：入ると出るところはすごい一生懸命やって完璧だったけど。

L：はい、内容が。

X：実際内容がね。なるほど。そのサポート室ってどれぐらい利用されるものなんですか、頻度というか。

L：でも、結構全学科の人がそこに行くので、予約取らないといけないみたいな状況だったので2週間に1回とかそのぐらいですね。

X：それはご自身の感覚的にちょうどよかったっていう感じなのか、もっと頻度あったほうがよかったなと思うのか。

L：もっとあったほうが。不安でした。面接の受け答えをずっと1人でやってたので。

X：そういうところはもしかするとサポートがあるといいかなみたいな話ですかね。

L：はい。

またKさんは、上記の「キャリアサポートセンター」にて実施されている「就活カフェ」において、教職員から就活に関するさまざまな意見をもらい、

企業の見方に変化があったという。

K：本当に先生たちがもう（笑）、口酸っぱく、あれやれよ、これやれよって言うってくれるんで、それに従ってって***（笑）、大体はそれに従うっていう感じですかね。

X：先生ってというのは担任の先生？

K：担任の先生もそうやし、〇〇先生や、ほかの先生もそうですし。

X：キャリアサポートの先生とかまだ？

K：1回、就活カフェに1回参加したんで、そのときに企業さんって、こういうふうな感じで、例えばなんですけど、給料面だけで見たら、例えば給料が下がったら、やる気なくなるから、そうじゃなくて、自分がやりたいって思うところをとかっていうふうな感じで、こうしたらいいよってアドバイスっていうような、これはすごく自分、役に立ったなって思ってて、もともと給料よけりゃどこでもええやろって（笑）、考え方やったんで、じゃあそれはよく見にやいけん（笑）。

X：そういう専門的なアドバイスをされるとこがうれしい、うれしいっていうか、いいところみたいな。

K：そうですね。言ってもらえるのも、すごくありがたいんで、こちらとしてもありがたいと思ってるっていう感じですね。

ここまでみたように、就職活動を経験したことがない学生にとっては、基本的な接遇指導や面接指導の経験が印象に残るとともに、「役に立っている」と感じられていることがわかる。また、就職支援のための専門的な部署を有している学校においては、やはりそうした部署の取組が就職支援として大きな役割を果たしていることがわかる。他方、利用者が多くなると、学生が希望している頻度で利用することが難しくなり、その点の改善要望が出ていることには注意が必要であろう。

4. 総評

本事業は、地方における IT 人材不足の解消という地域ニーズを背景に、地域の中小企業と連携し「汎用的かつ多様な能力・スキルを強みとし、協働的な働き方で ICT 技術を駆使して積極的に課題解決に取り組める人材」を育成する学校の構築を目指している。これをふまえ、本調査は、専門学校生の地域就職への意識、就職活動を把握し、カリキュラム開発の中でもキャリア教育・就職スキームの開発知見を得ることを目的に実施されたものである。以下、調査結果の概要を整理する。

まず、①専門学校への進学理由については、大きく 4 つに区分できる。すなわち、(1)好きなこと、やりたいことのため、(2)高校時代までに学んだことをより深く学びたいため、(3)将来に役立つため、(4)目指す職業のためである。調査対象者の学生たちは、「好き」を理由とした進学、目標とする職業に就くための資格取得を目指した進学など、それぞれ入学動機が多様であった。それはある種当然のことではあるが、注目したいのは、すべての者が明確に自身の入学動機を語っているという事実である。特に、本来の希望であった大学への進学が叶わなくなった者たちにおいても、専門学校への進学は消極的な結果ではなく、「役に立つことを」「やりたいことを別の道で」といった戦略的な意識のもとで行われていることが非常に特徴的であった。

また、そのような専門学校への進学のきっかけとして、②オープンキャンパスに関する語りが聞かれたのが、本調査において特徴的なことであった。オープンキャンパスに参加することで、曖昧だった学校へのイメージが具体化し進学を決めることになるというのは、よくある例ではある。そのことに加え、本調査で得られたのは、その際に「現場」出身の教員がその知見を活かした指導をしようのかを注意深く観察したり、教職員の手厚い働きかけに感動したりといった様々な行動・経験を学生たちが行い、そうした経験を経て進学を決めているという具体的な内実であった。このことから、新学科の募集戦略上においても、オープンキャンパスが極めて重要な機会となりうることが示唆される。

本調査は、専門学校に在学する学生を対象にしたものであるが、③学生は

授業や実習といった正課内の活動はもちろんのこと、正課外活動やボランティアなど、在学時のさまざまな契機を通じて成長感を持っていた。まず、授業内のグループワークを通じて、他者と共同したり自身の意見をわかりやすく伝えるような機会を重ねることが成長につながっていることが示唆された。また、学園祭の実行員や各学校における学生の自治団体である「学生会」、オープンキャンパスでの学生スタッフといった正課外活動での経験、さらには学外でのボランティア活動などが、リーダーシップやファシリテーションなどの力を身につける機会になっていると感じられていることも明らかになった。

そうしたさまざまな契機における成長感がある中で、本事業において中心的なテーマである④ICT（IT）関連スキルについて尋ねてみると、共通していたのは、タイピング技術やMicrosoft Word、excelといった基本的なツールのスキルが重要であると認識されていたことである。実際、情報系分野に所属している学生は、就職活動を経験する中で、一定程度のタイピング技術を有していることは、前提条件として企業側に考えられている印象を持っている。したがって、こうした基本的なスキル（特にタイピング技術）をより高めようと自主的に練習に励んでいるという声も聞かれた。さらに、情報系分野に所属する学生に注目すると、より高度なICT（IT）関連スキルの習得のために、積極的に学習に取り組んでいる様子が見えてきた。

次に進路選択の際の地域志向性を確認するために、⑤現在の進路希望や決定進路が県内か県外かを尋ねた。その結果、県内を希望（ないしは就職決定）している者が6名、県内を含む近隣県を希望（ないし就職決定）している者が6名、明確に県外を希望しているものが1名であった。このことから、全国的な調査結果とも符合するように、専門学校生の「地元志向」の高さを垣間見ることができる。進路先の希望別にその内実を尋ねてみたところ、まず県内を希望（ないし就職決定）している者からは、もともと「地元でいたい」という思いを持っていたとの語りのほか、家族との関係から地元での就職を希望しているという事情があることが明らかとなった。特に親が高齢であったり身体的・精神的な困難を抱えており、なおかつ兄弟が近くにいない

といった状況がある場合は、そうした事情を考慮した就職地の選択が行われる可能性が強いといえる。

次に県内あるいは近隣県を希望（ないし就職決定）している者の語りからは、地元との距離の近さを重視している様子が窺えた。所在県によっては、就職地が県外であっても実家から通うことができる者もおり、県外を希望していたとしてもなるべく出身地に近い場所で就職することを希望している者が一定数いることも、今回の調査から明らかになったことである。

最後に明確に県外を希望しているケースであるが、上述の通り、今回の調査対象の中には1名しか該当しない。この場合も、「地元から出たい」という意識が先にあるわけではなく、国家資格を活かした業務に積極的に関与できる職場（動物病院）を探す中で、県外が浮上している点は注目に値する。繰り返しになるが、これらのことから、専門学校生の地元志向の高さが示唆される。

また、本事業では地域（地元）中小企業で活躍する人材輩出を目指していることから、⑥地元企業のイメージや地元就職することのメリット／デメリットがどこにあるかを尋ねた。まず地元企業へのイメージとしては、CMや企業スポーツチームの取組みを通じて、地元企業が地域活性化に携わっていることを高く評価している語りが見られた。他方、実際の就職活動の中で、地元には自身が希望する条件を持つ企業が少ないという声もあった。地元企業への就職を決めている者においても、地元企業の（都市部の企業と比較した）相対的な賃金の低さを認識していた点は興味深い。

そうした地元企業へのイメージを持ちながらも、地元での就職を決めたのはなぜなのか。この理由に地元就職のメリットが垣間見えるであろう。調査対象者から聞かれたのは、「地元」というローカルな場所の安心感や、住み慣れた土地であるからこそその事情を熟知していることにもなう強みであった。他方、地元就職のデメリットとしては、地元のネットワークの狭さが、仕事や生活に悪影響を与える可能性についての言及があった。

さらに、⑦今後、職業世界へと参入しキャリア形成していく際に重視する価値観について尋ねてみたところ、本事業のアンケート調査と同様、給与に

関する語りや、休日の重要性に関する語りなどが聞かれた。これは専門学校生が、今後のキャリアを形成していく際にいわゆるワークライフバランスを非常に重視しているといえるであろう。

最後に、⑧就職活動支援について尋ねたところ、現段階で就職活動を経験したことがない専門学校生にとっては、履歴書の書き方や、礼儀作法、接遇、マナーなどの基本的な事柄が役に立っていることがわかる。さらに就職が決定している者にとっては、学校内にある就職支援の専門部署の取組が、実際の就職活動の際にも有効であったとの回答があった。

最後に本調査の結果を踏まえ、本事業の目的を遂行するための提言を行いたい。

第一に、高専接続事業の一環としてのオープンキャンパスの充実である。本ヒアリング調査では、調査対象者の多くから、所属校への入学のきっかけとしてオープンキャンパスがあげられていた。単にそれぞれの学校の雰囲気や教育内容について詳しく知る機会になるだけではなく、そこでの教職員とのやり取りを通じて、入学後の学びを具体的にイメージできるようになったり、自身を受け入れてもらえるという感覚を持つことができたりする様子を、学生の語りから伺うことができた。加えて、当の学生にとってもオープンキャンパスの機会は重要である。今回の調査対象者の中には、自身が高校生の頃に参加したオープンキャンパスに、学生スタッフとして参加したことが、成長の機会になって事が語られていた。そのことはまた、参加者である高校生にとっても、先輩である学生との交流を通じて入学後のキャリアパスへのイメージを具体化する機会にもなりうるであろう。新学科における募集戦略上、オープンキャンパスのような高専接続事業が重要になってくると思われる。

第二に、地元の中小企業との一層の連携である。今回の調査においては、多くの学生が地域（地元）ないしは近隣県での就職を希望しているものの、他方で地元企業の選択肢の少なさや都市部と比較した際の相対的な賃金の低さへの言及があった。こうした指摘の一部は確かに事実であるだろうが、

一方で「地元には選択肢が少ない」「地元企業は賃金が低く待遇も良いものではない」というイメージが先行してしまうことは、地元企業をも視野に入れた就職活動の機会を逸することにもなりかねない。実際、本事業の中諸企業ヒアリング調査からも明らかになっているように、地元中小企業からの専門学校への期待は大きい。学生の持つイメージと実態との齟齬を埋めていくためには、学生側の地元企業理解が不可欠になるだろう。本事業の専門学校地域就職意識調査（アンケート調査）からは、ICT（IT）関連スキルについて専門性の高いYIC情報ビジネス専門学校において、全体的な傾向と異なり第一希望の就職地を「県外」としている者が半数を占めていることがわかっている。こうした意識も、上記のようなイメージと実態の齟齬が背後にある可能性は否定できない。地元企業のニーズを取り入れた教育課程編成はもちろんのこと、学生が積極的に地元企業のことについて知り、地元企業に必要とされる人材であると感じられる機会の一層の充実が肝要となってくると思われる。

今後、以上の結果を踏まえた具体的な施策の検討や実行が求められるであろう。

付録：専門学校生地域就職意識調査（ヒアリング調査）質問項目

◎専門学校生に対する定性的調査の質問項目

調査目的（抜粋）

- ＊専門学校生の地域就職への意識、就職活動状況を把握し、カリキュラム開発の中でもキャリア教育・就職支援スキームの開発知見を得る
- ＊専門学校生の将来に対する希望や不安を理解し、キャリアカウンセリングに役立てる

1. 専門学校への進学理由と専門学校での学びについて

- ・専門学校（現在の学校）に進学した理由を教えてください（例：興味のある分野だった、資格が取れるから、実家から近かった…など自由に）。
- ・ほかの学校種（大学や短期大学）や別の専門学校と比較していた場合は、その理由も教えてください
- ・専門学校で学ぶ中で、特に「役に立った」と感じることはありますか？（授業、実習、資格取得など）
- ・専門学校で学ぶ中で、リーダーシップや他の人への共感力、ファシリテーション力などが身についたなど感じた場面や出来事がありますか？
- ・入学前と比べて将来の目標や展望、価値観などに変化はありましたか？変化があれば、具体的にどのようなことですか？

【今回の調査が反映される内容について】

- ・今回、地域経済の活性化ができる「隣に居てパソコンやSNSの設定など助けてくれたら嬉しい人」を育成しようとしています。
こういったコンセプトは、いいなと思いますか？
あなたはもし自分がIT技術を習得したら、困っている人を助けたいと思いますか？
- ・AIなど自分で使うことはありますか？
- ・SNSでもAIが搭載されて自分好みにカスタマイズされたりしていますがそういったのは嬉しいものですか？
- ・

【ICT技術やスキルについて】

- ・授業などを通じて学んでいるICT技術やスキルはありますか？
- ・授業などを通じて学んでいるICT技術やスキルについて、どの程度の自信を持っていますか？（WordやExcel等のスキル、SNSの運用、動画編集の技術など）
- ・専門学校で学んだICT技術やスキルの中で、今後役に立ちそうだと感じることはありますか？（プレゼン資料作成や、SNSでの情報発信など）あるいは、実際に役に立ったと感じたことはありますか？
- ・自主的にICT技術やスキルを向上させるために行っていることはありますか？

2. 将来展望について

- ・現在考えている（決定している）進路はありますか？その理由も教えてください。
- ・将来のキャリアについて、どのくらいのスパンを検討していますか？（とりあえず就職、転職も視野、長期的に働く…など）
- ・将来のキャリアについて、期待していることや不安を感じることはありますか？

【ICT 技術やスキルについて】

- ・将来の進路を歩むにあたり、ICT 技術やスキルが求められる場面はあると思いますか？

A)就職活動の経験について

- ・就職に向けた活動の状況について教えてください。
- ・就職に向けた活動の中で、専門学校で学んできたことが活かされている（た）と思うことは何ですか。一方で、苦手だとか難しいなと感じている（た）ことは何ですか。

B)地元（出身県）企業や地元就職へのイメージ

- ・地元で就職することについて、どのように考えていますか？（地元就職を考えた場合はその魅力、または抵抗感があれば教えてください）
- ・地元企業について、どのようなイメージを持っていますか？
- ・地元で働くことを選ぶ場合、どのような条件や要素が重要だと思いますか？（給与、職場環境、仕事のやりがいなど）
- ・（地元に限らず）働くにあたって大切にしたいと考える条件や要素、価値観はなんですか。

【ICT 技術やスキルについて】

- ・（情報工学系のみ）地元企業に就職することを考えたとき、どの程度の ICT 技術やスキルを求められる印象がありますか？

3. キャリア支援や就職支援について

- ・学校でのキャリア支援や就職支援などで役に立っていると思うことはなんですか？
（特別な場面でなくても、先生との日常的なやりとりや、実習先で聞いた言葉など、どんなことでも構いません。）
- ・一方で、もっと充実させた方がよいと思うことはなんですか

文部科学省委託事業令和6年度「地方やデジタル分野における専修学校理系転換等推進事業」『地域中小企業と連携によるIT担当者育成・採用促進モデル開発と普及推進事業』

「専門学校生地域就職意識調査（ヒアリング調査）」報告書

令和7年2月

学校法人 YIC 学院
〒754-0021 山口県山口市小郡黄金町2番24号

●本書の内容を無断で転記、掲載することは禁じます。